

ヒステリー性の婦人

醫學士 杉 江 董

(一)

ヒステリー性の女性ほど兒童及び處女の時期に於て頗る危機に富み、一家の主婦となつて家政育兒の任に當つても、動もすれば平和を破り、不幸を來す原因をなすものは有るまい。實に移り氣で徒らに奇を衒ひ、新を好み、虚榮に迷ひ、空想に驅られ、誘惑に染まり、動もすれば時代の險惡なる思想に擒はれ、戀に狂ひ、愛に溺れ、家を出で、親を捨て、身を亡すものゝ如きはみなそれである。良人子女を顧みず、一意外觀の美を追ひ、自己の慾望を充たすことにのみ焦慮して、更らに家政を顧みず、一家常に不幸の境遇に陥るものゝ如きも亦それである。

ヒステリーは固と各人精神が持つて居る特質が基礎となつて現れて來る病氣である。そして其特質は、祖先から遺傳して來るのが最も多い。母親がヒステリーに罹つて居る様時は、其の子供に矢張りヒステリーが多い。随つてヒステリー性の素質あるものには、小供の時から既に身體や氣質に異狀があることが多い。發育が遅かつたり、

る。教育素養があり克己心の強い婦女は、可なり重い己が病癢すら案外巧く制御して、あつばれ身を處し、家庭の平和を保ち得た例は少くない。左ればヒステリー性のものは、不斷意志を涵養して、感情に負けない様に努め、常に精神身體の衛生に注意して行つたら、少く其素質たる病氣を未發に杜絶することが出来る。

(二)

情人に對する情火燃ゆるが如く、親を捨て家を捨て果は世間の名譽も義理も忘れて戀の暗路に迷ひ込むのは、ヒステリー性の女性に屢々見る。

蓋し只一時の好奇心に驅られ、虚榮に迷ひ一種變奇な思想に感溺して、戀の虜となり取り返し付かぬ汚名を一生に流し、地位あり教育ある淑女夫人で意外の醜聞を立て世に其不倫を誦はれ、良人の顔や家名を傷くる人々の中には、實際ヒステリー性のものが多い。此様なものは戀愛に對しては最も危険な傾向を持つて居ると云はねばならぬ。

芝居を見ても小説を讀んでも其感じ方が一層強烈で、動もすれば其等に現れた人物光景に憧がれ、泉の様に湧き出づる種々の空想は目前に妖艶なる春を畫き出して花に狂ひ酔ひ盪けて終に清淨の身は魔神の犠牲に供せられて了ふ。斯くまで熱き一すいの戀も、其冷むるのも亦早い、浮氣心を秋の空に譬ふるなら、ヒステリー性婦女の情心こそ最も其

ヒステリー性の婦人 (醫學士 杉江董)

痙攣があつたり、寝惚けたり、眩暈がしたり、譯もなく泣いたり、非常に不機嫌で怒りつぼく我儘強情の様ながある。小學時代でも他の少女とは、何うしても氣質が違つて居る。中には一寸發明で氣が利いて物覚えがよく手工や唱歌などが殊に優れて居る様なものがあるが、此等のものでもよく觀ると矢張り外の少女と比べて疲れ易くて長續が爲なかつたり、種々奇妙な癖があつたりすることが解る。

左うして此様なものに、心配恐怖などの強劇な感動、身體の病氣、負傷などがあると、其れが原因になつて、直ぐと内部に潜んで居つた病根が萌芽して、種々の精神々經の病氣を起して來る。殊に妙齡の處女期になつて斯うなるのが多い。併しヒステリーは元來精神から起る病氣であつて、自分や他人の意志で易く支配される。此病氣に限つて、催眠術の效驗があるのもこれが爲である。自分の氣の持ち様一つで、病氣も出れば又治りもする、手足が痺れて居ると思へば動けなくなつたり、歩けなくなつたりする。感情に脆いもの程、病氣を負ふることが非道い。反對に強固な意志を以て病氣に打ち勝つと、一程度までは病魔の蹂躪を防止することが出来る。

適例であらう。熱するものも早い冷むるものも亦早い。不圖せる好奇心に驅られ一時の虚榮に心迷ひて燃えた戀は忽ち氷結して了ふ。薄情女だの義理知らずだのと呼はり下級の社會に於て往々及物三昧の慘劇を演出するなどの類は、此様な場合が多い。

變挺な思想にかぶれて、最初から自分勝手な我儘で獨身を主張して、世を拗ね者と云はれたり反對に又自ら招いて幾度も破鏡の不幸を累ね徒らに世や人を恨む様な婦女の中には實際ヒステリーのものが多い。

(三)

女性の一生中、最も危険な時は、破瓜期前後である。即ち普通十五六歳前後で、此期に於ては身體の發育が急速に進歩して殊に生殖能力が完成するや一方精神は甚だ抵抗力が弱く始終動搖して居る。種々な身體の疾病急激な感動家庭境遇の不良などは、直ぐと病氣の原因となつて了ふ。まして濃い遺傳があつたりして生來ヒステリー性の素質を持つて居る様な婦人には一層其等の影響が非道く、重いヒステリーが起つたり自殺したりする様なことがある。

某少女は母が虚弱の質であつた小供の時から別に病氣にも罹つたことが無つたが十四歳頃からいつか沈鬱性の氣になり一室に閉ぢ籠つて人中に出るのを嫌ひ出し食も進まず夜も眠らぬ様なことがあつたりさうかと思ふと氣分が變つて面白さ

うに饒舌る様なこともあつた。
 又某女は小供の時から虚弱で癪が強く十五の時東京に出て
 某裁縫女學校に入りて勉強し成績もよかつたが十六歳からヒ
 ステリーが始まつて時々癪癪などが起つて来た。

結婚前後などには憂慮や恐怖などの感動が強烈であるから
 殊に纖弱な婦女の精神は易く劇動攪亂され、許嫁の間や結婚
 の晩から非道いヒステリーが起る様なことは往々ある。

女性特有の天職たる月経妊娠または分娩も身體に非道い變
 動を起して來ると同時に、精神にも故障を起すことがある。
 初めての月経や分娩が原因になつて、ヒステリーが起つて來
 る例は多い。又ヒステリーのものになると殊に月経時に限つ

て重くなり氣質が變つたり夢中になつたりする様なことがあ
 つて亂暴したり家を飛び出したり萬引をしたり放火をしたり
 する様な怖るべき犯罪行為も少なくない。

某婦人は分娩に引き續き氣短くなり些細のことに怒り散
 らして人に掴み蒐る様なことがあり夜中無斷で家出して村中
 を歩き廻つて歸る様なことがあつた。

又某女は元來ヒステリー性で少し氣に食はないと亂暴した
 り家を飛び出したりする癖があつた。十六歳の時勉強の目的
 で東京に出て下宿屋の金一圓餘を盗み裁判所に引かれて有罪
 の宣告を受けると忽ち意識を喪ひ自分の衣服を裂き殺して吳

れ天道様生かして置かぬなど云ひ出し二ヶ月許の間夢中とな
 つた。それ以來重いヒステリーになつた。

つたり、肉感が失せて居るなどの場合もあり、又婦人科病な
 どのある爲めであることもある。
 某ヒステリー婦人は肉情が全く失せて仕舞つた爲めに、良
 人が道樂をするのもそれが爲と思ひ毎日嫉妬心を燃して良人
 に食つて蒐り家内風波の絶間が無かつた。

又は智の方が情よりも優つて居つて、畢竟夫婦と云ふ關係
 は單に社會生活上の必要から迫られた人爲的の出來事に
 過ぎない、良人は單に一家の主權者であると云ふ位の意味で
 畏敬奉仕するの外、別に良人から温かい愛情を求め様とも仕

ないこと又多くは移り氣の冷め易い性癖なども其原因であ
 る。一日も離れるを厭うて居た程の婦人がいつの間にか良人
 と別居しても平氣で、さして淋しがらぬ様なことがある。

兎に角非常に思ひ焦がれた人と夫婦となつて俄かに其良人
 に對する愛情が冷淡になつて來る様なことは、ヒステリー性
 の婦女に尠なくない。小供に對する情も人によりて濃淡があ
 る、全くうさがつて構ひ付けないのがある。同じ小供等の

中でも殊に可愛がるのと、さうでないのがある様な好き嫌
 ひがある。又子供に可愛がり方が始終機嫌によりて變はる、
 従つて教養の仕方が寛嚴其宜しきを得ない様なことがあり、

往々教育上不良の結果を來たす様なことになる。日常の行動
 や偏奇の氣質なども母としての模範とならず、却つて小供に
 悪い影響をなす様なことがある。

ヒステリー性の婦人 (醫學士 杉江董)

良人に對する嫉妬は夫婦の情愛として當然であつて謂は
 愛の反面女性を飾る天賦の美點である。

併しヒステリー性婦女には往々此嫉妬心の餘りに強烈に過
 ぎることがあつて兎角家庭に風波の絶え間ない様なことが少
 なくない。勿論實際に良人が素行修らず身を放埒に持ち崩し

て居る様な場合なれば其れも尤であるが往々にして良人に何
 等非難すべき件がないにも拘らず始終良人を嫉妬の眼で視
 患の炎に胸を焦して良人の一言一行盡く何か意味ある様に

曲解し怨恨憤怒の情は日常の言語舉動に表れ非道いになる
 と當り近所の見境もなく、良人に食つて蒐る様な事があつて
 一家波瀾の斷え間はない。

恨るべきは全く根も葉もないことを云ひ出し嫉妬の皆を逆
 立て、良人に迫る様なことである。思も寄らぬ突飛なことを
 云ひ出す、他から聞いても到底信を置くことが出來ない様な

ことまで主張する、非道いになる、良人が現在肉親の姉妹
 と關係して居る杯と云ひ出して良人を困らす様なことがあ
 る。自分では全く左う忘信し切つて居るので、幾ら他から其

無根で餘りに馬鹿らしい事を辯じても到底聽き容れてそれを
 撤回し訂正する様なことはない。
 これを反對に、餘りに良人に對して冷淡に過ぎることもヒ
 ステリー性のものに屢々見る。これは生來に愛情が冷淡であ

(五)

情愛の生來濃い人と薄い人とがある外に情愛の現れ方が普
 通から變態して居る様なことがある。非常に早く心肉の情が
 發達して來る杯はそれである、普通なれば破瓜斯即ち二十歳

前後で青春の心が動き初めるものであるが、非道いになる
 と既に十歳前後で物心を覺える破格な例もある。
 此様な常軌を逸した少女こそ其危険最も畏るべきものであ

つて、また肩上の小娘で色狂ひの結果、終に身を落して一生淪
 落の淵に沈んで了つた實例は、新聞杯にも多く見る所である。
 何うしても普通健全のものでないことはすぐ解る。

同性の愛なども變態の一種である。矢張り相思の情の熱烈
 なことは普通の男女の愛と少しも變りはない、互に痴話喧嘩
 もすれば嫉妬も仕合ふ、そして互の間には或は同じ衣服を着

たり、同じ色のリボンを挿したり、指輪を簞めたり、或は自
 分の鮮血で起請誓紙を書く様なことをする。もつと極端にな
 ると相手の女は頭の髪から身形まで全で男の様な風をして居

る様なこともある。
 此種の女に限つて、却つて眞の男子に對しては一向に無頓
 着であることが多い。

猶ほ變態の一種として、良人から苛酷の目に合はされて、
 却つて快感を感ずることがある。此様なものになると故意と
 夫に手向ひ夫を怒らせ撲ち打擲されて喜ぶものがある。

(六)

ヒステリー性の婦女は大概機嫌であつて丁度照り降り定めな日様の様に變る。今喜んで居るかと思ふと些細の事から急に怒つたり鬱ぎ込んだりする。

併し一寸遇ふと大概は氣分が快潤で如才がない。却々上手に愛嬌を振り撒いて、自然と初面識の人には非常に好かれる傾向がある。

胸襟を開いて自分現在の境遇や經歷を包み隠さずも話し、忽ち相手の同情を引いて了ふ様なことが多い。

兎角ヒステリー性のものは交際場裡の愛嬌者となり、人々から持て囃されるのも之れが爲である。夫婦の間でも妻が怒りつばく機嫌で困らす事は多いが、何となく其氣質が良人の氣に入つて別れられない様なことが多い。

不斷の氣質もいろ／＼であつて、小心陰氣で些細なことを氣にし、人中に出るを好まず動もすれば厭世的となる様なものもあり、反對に怒りつばく僅かのことに直ぐ立腹して小言を並べる癖のものもある。或は常に陽氣上機嫌で浮世太平樂を唱へて獨り悦に入つて居る様なものもあれば、或は非常に物に凝り性のものや反對に非常に軽卒で一事に落ち付かず始終氣が移り變り色々のことに手を出して、成るべく世間に目立つ様なことをし、進んで弱いものなどを救助して義侠心を街ぶ様なものもあり、又或は自負尊大で、何事も自分本位で

我慾の事許り云ひ他人の事は殆んど眼中になく無慈悲道なことをする様なものもある。

(七)

氣質が元來變つて居るものが多く機嫌が始終移り易いと共に、物事に感動することが非常に強劇であることも亦ヒステリー性の特長である。

些細の事に非常に喜んだり怒つたり悲しんだりする。そして同時に身體にもいろ／＼の徴候が現れて来る。例へば顔色が非常に變つたり呼吸苦しくなつたり口が別けなくなつたり、手足胸を震はして悶がく様な事が起つて来る。

勿論普通の人も感動の強いと云ふ人はあるが、それ等は皆原因があつて起り原因が止めば消えて仕舞ふのが通例である。ヒステリーに來る分は極めて些細の原因でも強い感動が長く續く、原因は止んでも感動だけは消えない、泣き出した半日も一日も泣き止まぬ様なものである、非道いになる。何れも外観には原因理由がなくて、強い感動が急に起つて來る様なこともある。

斯ふ云ふ風で非道く怒つた時は、無我夢中になる。前後の別もなくなつて、相手見ずに食つて寛る。大きな聲で吐鳴り、手當り次第に物を投げ付けるなどの亂暴狼藉をする様なことがあつて、到底も側から手も付けられない程である。

苦悶の感情などもさうである胸が壓迫される様に苦しくな

り、呼吸が詰まつて顔色が眞青になる身體がふる／＼震ふ愈々堪らなくなつて來ると夢中になつて大變な亂暴を仕出かす様なことがある。自殺したり夫を傷けたり嬰兒を殺したりするのとは尠なくない。某女は母親が精神病で入院して居たのを及物を携へて面會に行き母を殺して置いて自分も死んで仕舞はんとした。

又ヒステリー性のものには、酒癖の非常に悪いものがある。大酒で一度飲み初めると金のありたけを飲み盡さねば止まぬものがある。又反對に僅かの酒に非常に酩酊して殆んど夢中の様になつて泣いたり、怒つたり、終には恐ろしい亂暴したりする様なことがある。

(八)

ヒステリー性のものは兎角物の理解が良く、觀察が敏くて、些細なことに直ぐ氣がつく。一口に云へば伶俐なものが多し。歌留多などつても却々巧い。或は又裁縫が上手だつたり繪が巧かつたり音楽が殊に勝れて居て天才と呼ばれる様なことがある。

一寸遇つた時は氣が利いて直ぐ相手の顔色を読み、なかなか人を反らさない。併し段々深く付合つて見ると斯う云ふ人は只表面許りで奥がなく輕躁で眞面目な所がない始終氣が移り變つて何んでも新規なこと珍らしいことを直ぐ喜んで迎へる。

斯う云ふ風で交際は廣い割合に長續かせず親身の友人が出來ない。話が甘い割合に信用が薄い口では大きなこと同情のあること義侠心のある様なことを云ふても其割合に實行に現れない。

其癖前云ふた様に我儘強情で何事も自分本意で得手勝手自分さへよければよい。同じ仲間でも一番威張つて夜會の音樂會の席でも何んとか人より先になつて少しでも人に目立つ様な談話や素振りをして一番持てなければ氣に容らぬ。少し容色でも美しかつたらそれこそ自惚れ反つてそれが顔に現はれる紳士は皆自分の容姿の美に見蕩れる、男の生命は自分の秋波一つで何うでもなる様な慢心を起して來る。

粉粧に浮き身を籠めて頭の髪飾り衣服の好み有る丈の贅を盡して流行を追ひ綺羅を盡し人目を引いて大得意となる。少々身體の具合が悪い時でも身仕舞や湯化粧は却々怠らない程である而し大概は悪酒になつて歳に不映りの色や柄を選り好んで却つてきざに見える様なことが多い。

(九)

時々物覺が悪くなる様なことが起る舊いこと新しい事を忘れて仕舞ふ。非道いになると自分の生れた年月日結婚した月日さへ忘れて了ふ。今朝何をして、今食ふた飯のお菜が何であつたのかさへ答へる事が出來ないやうなことがある。今聞いた事でも薄茫んやりと覺えて居る様なことがある。

或は肝腎なことは忘れて了つて不必要な枝葉に渡つた事を覺えて居る様なことや又は事實を色々間違つて覺えて居り或は全く事實になかつたことを覺えて居る様なこともある。

斯う云ふ様に想ひ出したの間違から丸で根もない夢の様にと云ふ。非道いものなる荒唐無稽のことを云ひ出し、自分は海底旅行を行つた何々戦争に従軍したなどの到底事實有り得べからざることを吹聴する様なことがある。

ヒステリー性のものゝ記憶の悪いのは色々の理由に依るのである此様な人には時々意識が朦朧として丸で夢心地になつて了ふ様なことがあつて、其間のことは記憶に間違が多い又それだけでなく大抵は物事を考慮する作用が巧く行かない。

それから亦注意力が始終足りない、見たり聞いたり感じたりした事が確かり頭に入らないなどの原因から自然記憶が悪くなつて來るのである。

殊に感動の劇げしい時不機嫌の非道い時苦悶に悩む時などのことは記憶に残ること一層悪くなる。

(十)

又空想が盛んに湧き出る現在や未來に色々の空想を畫いてそれに憧がれそれを追うて止まぬ様なことが多い。

動もすれば演劇や小説などの筋や人物に同化して了つて、其れから自分で色々の空想を畫き終には實際に其んな真似を仕出かす様なことがある。或る少女は阿波の鳴戸の子別れ

されたなど、云ふ場合が多い。夜中某所を通行の途中強盗に遇つて何々を強奪されたとか、醫者が診察の際強姦したとか云ふ様なことを訴へて、人を騒がせる様なことがある。

此等は全く記憶の間違や空想の爲めに實際左う云ふ目に遇ふた様に思つて云ふのであるが、一方に亦此の様な人には往々是非辨別心が缺けて居る爲め、深い前後の考もなく只一時の好奇心に驅られ人々を驚かして見たいとか或は腹立ち紛れに復讐の爲めか又は盗みの出來心などの爲めに、故意と虚言を吐く様なこともある。

今隣の村が大火事だ、彼處の森に情死がある、自分はさる華族の胤だ、彼の人は何時か泥棒した事がある彼の女には情夫がある此品は盗んだものではない貰つたのだ否拾つたのだなど、云ふ様な事が多い。

故意と虚言をつく様な時でも如何にも眞實らしく云ふ。顔付きから素振りまで嘘とは思はれない様に、上手にやることがある。非道いものなる強盗に遇つたとか強姦されたとか云ふ場合には、我れと吾が身體に傷け血を出して迄も眞實らしく見せる様なことをする。中には痛くもない脚を跛を引いたり赤インキなどを塗つて血に見せたりする様な淺薄な嘘をつくものもある。

某女二十四歳は夢現に見知らぬ男が入り來りて強姦した上、所有の金を強奪して逃げたと思ひ大騒をして訴へ出たが

ヒステリー性の婦人、醫學士 杉江 晋

の場を觀て自分も幼少より親に生別れたものと思ひ西國順禮姿になつて諸國を經廻つて親を尋ねるとて家出したことがある。又某二十二歳の女教員は無斷家出して鎌倉の某寺に行き尼にならんと頼んだが兩親の許可がなくて弟子となることが出来ないと云はれて歸つた。

斯う云ふ風に二代の女丈夫や毒婦や可憐の女はみな空想を煽動さす原因になつて、殊に青春妙齡の少女にありては戀愛となり虚榮となり墮落となり斯くて幾多の悲劇は演出されるのである。

社會の經驗に乏しい空想に驅られ易い少女は兎角小さい胸に溢るゝ様な榮華の空想を畫き夫の撰擇を誤つたり結婚の時期を失したりして自分の失意不遇を歎け花と諺はれし面影も妻れ果てゝ消えん許りの露の命を漸く支えて居る様な悲惨な境遇に陥つて了ふ實例は尠くない。

猶ほ悞るべきは戀愛の空想を實際に求むることである芝居や小説の濃艶な筋を理想として之れに憧がれ名譽地位を顧みるの違もなく戀に狂ひ色に迷ひ短かき夢覺めて後悔の臍を噛むも已に及ばず一生淪落の運命に果つる様なものは皆それである。

(十一)

斯う云ふ風に記憶に間違が多く空想が烈しいので自然知らず識らず虚言を吐く様なことが多い。殊に中傷された、迫害

検査して見ると其陳述する所が曖昧で薩張り要領を得て居ない。又某女は醫師が診察の際麻酔を用ひ強姦をして其れが爲めに懷妊したと云ひ女の父も之れを信じて共に裁判所に告訴した其陳述は如何にも眞實らしくあつたが深く事實を照し合せて見ると符合しない點が多いし又妊娠も已に其當時にして居たことが明白となつた。

非道いものなる狂言の自殺企圖などをやつて見せるものもある。死んでしまふと口癖の様に云ひ幾十回となく書置などして家出をしても實際死ぬるものが少ない。身投げなどするにも通行人が見えると飛び込んだり故意と淺瀆に這入つたりする、毒を仰ぐ真似をして薬を口中に含み人知れず吐き出して了ふ、愈々非道いものになると、紅唐や赤インキを口の邊に付けて吐いた様に見せかける芝居めきた真似をするこゝとさへある。

十八歳の某女は繼母との折合悪しく、某家へ養女に行つたが都合あつて歸宅した以來ヒステリーに罹り繼母と喧嘩しては家を飛び出し前後五回も投身を圖つた。

斯う云ふ風にヒステリー性の婦女は虚言をつく癖があるから其云ふことを逐一信する譯に行かないことがあるから、家庭に於ても充分注意を拂はなければならぬ、裁判所へ證人などになつて呼び出された時などでも普通の人と同様に取り扱ふ譯に行かないことがある。

(十二)

ヒステリー性のものは、暗示され易いことが特徴である。病氣があると云はれると病氣になつたり治ると云はれると消えて了ふ様なことがある。例へば醫者が左腕が痺れて居ると云ふと眞實に利かなくなつて了ふ。又汽車電車などで災厄に遇ひ大怪我をしたと思ふと眞實に手足が利かなくなつたり感じ解らなくなつたりする呪咀祈禱なども全くこの類で御供水など云つて神前に供へた水を飲んだり塗つたりして病氣が治つたり何か石や金で擦ると病氣が治るなど云ふ様なことは皆此の暗示の作用によるのである。

それで斯う云ふ人は自然物ごとを輕信し易い爲めに種々の迷信が起つて來たり神佛に惑溺する様なことがある。

又斯う云ふ人は人の病氣を眞似る様なことがある。左う云ふ風で同じ様な病氣が流行する丁度病氣が傳染でもする様に見える事がある。

此の様に暗示にかゝると云ふ事は人から云はれる時許りでなく自分獨りの考や感じからも容易に暗示せられる。肺病患者の側に行つて傳つたと思ふと全く肺病患者の様になつて了ふ。顔色が青褪めて頭痛がして咳や痰が出て夜は寝られず食が更に進まぬ様なことがある。

或る婦人は懐妊したと思つたらそれが原で下腹が段々膨れ出し、月經が止まり、乳房が大きくなつて搾ると乳汁が出る。

病氣は何處にもない、すつかり治つて了つたなど云はれると醒めてから今迄あつた病氣が無くなつて居る様なことがある。極端な例になると泥棒せよ火付けをせよなど云はれると云ひ付け通りそんなことをすることがある。

斯う云ふ風にヒステリー性のものは極めて容易く催眠術にかゝるものであるが、又此の様なものになると習慣的に短時間の催眠術にかゝつて居る様な茫んやりした状態が時々起る様なことがある。裁縫など一生懸命やつて居る最中に不圖一時茫んやりして全く別人間になつて了つて其間にやつたことは後から少しも覚えなないことがある。又反對に全く間違つたことが後から思ひ浮び強姦されたとか強奪されたとか訴へる様なことがある。

此の様な丁度催眠術にかゝつて居る様な状態は實際強弱長短の差はあるがヒステリーによく來る。全く暗示性の充進に基くのであつて尙ほそれにヒステリー性のもは注意が散亂する事や考慮が巧く行かぬことなどもこれが原因になるのである。

それゆへ非常に恐怖忿怒及び不眠飢餓などで非道く疲れ衰へた様な時などにもよく來ることがある。

(十四)

以上述べた様にヒステリー性のもは暗示性が非常に充進して居る爲めに自然人から煽てられ易く、欺まされ易い。始

醫者が見てさへ立派な妊娠と間違つた程であつた。自分の信する名醫に診て貰つて確かに肺病でないと言くと見る間に元氣が元の様に恢復して來る。

斯う云ふ様に暗示され易い爲めにヒステリー性のもは、所謂精神的療法でよく得心行く様に云つて聞かすと病氣が案外容易く治つて了ふことがある。但し某者が醫者を信じて居ると云ふことは大事な要件である醫者が拙い、治すことが出來ないなど、思つて居る間は到底暗示にかゝると云ふことは六ヶ敷い。

聲が出なかつたりするのが出る様になつたり起ち居歩行が出来なかつたのが出来る様になつたりするなどはみな此類で決して不思議な事はない。

(十三)

催眠術にかゝり易いのも全く暗示性の充進に基くのである。他から睡れよと命じたり又は自分でも眠らうと思ふと直ぐ睡つて了ふ。

催眠術にかゝつて居る間は非常に暗示がよく、何でも術者の意の様に成る。術者が手が動かぬと云へば動かない針で刺しても痛くないと云へば其通り痛くない様になる。

大切なことは催眠術にかゝつて居る間に云はれたこと命せられたことは醒めた後でも左う信じたり命令通のことをする。

終移り氣で一事に落ち付かぬ、物に倦き易い、長續きがしない、友達が始終代はる、學校を所々轉ずる、職業を代へる、奉公しても、一所に長く辛抱が出来ない様なことがある。

それに善いこと悪いことにせよ世間に目立つて人々が騒ぐ様なことは眞似て見たいと云ふ癖があるので、善い方の眞似なれば好いが、無教育のものや生れつき少し智の足らないものになると、飛んでもない間違つた考を起して芝居小説活動寫眞などを見て姦婦毒婦などの見様見真似をする様なこともある。

或少女は悪漢に唆かされ二錢銅貨一つを貰つて放火をしたことがある。又某女は悪い男と情を通じ其男に欺されて器具の洋刀を以て舊主人の宅へ強盗に押し入り金五圓を強奪して男に渡したことがあつた。これらは極端な非道い例ではあるが實際あることである。

勿論教育があり道義が健固であれば假令ヒステリー性のものと云つても熟慮判断が正當に出來誘惑動機に對してもよく反抗することが出来る畢竟誘惑動機に巻き込まれて了ふのはそれに對する抵抗力が薄弱であるからである智力道徳意志が健全に發達して居りさへすれば如何な悪魔の襲來にも直ちに之れに備へることが出來て身の神聖を汚す様なことはない。

(十五)

ヒステリー性のもは日常家庭にあつても内輪を巧く取り

廻すことが六ヶ敷い。無性になつて何事もせずごろ／＼して居て小言や理窟を並べる針仕事などしても長續きがせず直ちに倦きて仕舞ふ。自分は一室に閉ぢ籠つて了つて朝から晩まで寢込んで居る様なこともある。反對に又毎日の様に出好いで少しも内に居ない、夫や小供のことはそつち除けにして知己を訪問したり諸所の婦人會合の席に出席したり芝居呉服屋と物見遊山に其日を送り、珍らしい來客などを喜ぶ様なものも少なくない。

家政をとつても疎漏のことが多い大切な來客を主人に告げるを忘れ必要な來狀の置場を忘れたりする金錢の出し入れを書き落したり反物を間違つて裁つたり糸の通つて居ない針で縫つたりする様なこともある。

下女下男に對しても其使ひ方に斑がある。自分の機嫌によりて馬鹿に可愛がつたり痛らく當つたりする非常に氣に入つて居た下女を一寸したことで暇を出して了ふ様なことがある。兎角斯う云ふ家庭には多く下女など長續がしない。

自分が勝手に遊びに行く時でも、成るべく小供などはうるさがつて連れて行かない、赤ん坊を乳母や守子に任せて置いて芝居や寄席に遊び廻る様なものもある。馬鹿に小説に凝つたり文學に溺れたりなどして家事は一向に構ひ付けないなどもそれから却つて飛んでもない悪い結果を生む様なこともヒステリー性のものに往々ある。

口が開けなくなつたり、手足や胴に痙攣が起つたりする、又手足が痺れて利かなくなる、物を握つたり起立歩行が出来ない、顔の相が崩れて鼻や口が曲がる、喉の開閉が利かなくなる、舌が出せない、出すと曲つて居る様なこともある、身體が我れ知らず變な運動をしたり、指尖や舌の端がピク／＼震べたり、眼瞼や肩などがピク／＼動く様なこともある。聲が出なくなる、話をしない、字が書けない、吃る、咳が出る、血を吐く、呼吸が詰まる、嘔吐、下痢する、皮膚が眞赤になる、熱が出る様なことも往々ある、又月經が止まつて下腹が膨れて全で妊娠と間違ふ様なこともある。

(十七)

斯う云ふ風にヒステリー性のものには種々と身體の不具合が起つて來る、そして一方に於ては感情が非常に亢進して居るが爲めに少しのことを非常に氣にする、いろ／＼と心配苦勞をするので益々病氣は増悪して來る様になる。

一寸した不具合を大きく感じ、僅かの事を餘程の大病の様に氣にして、彼所が悪い此處が痛いと並べたて顔色に表はして誰れにも被にも吹聴する、少し頭痛でも始まる頭を縛つて氷嚢を置いて、二日でも三日でも寢込んで了ふ色々の薬を服み、醫者に我儘を並べ、醫者の選り好みをする、何んでも新規な評判のよい新薬や療法などが出ると金に構はず受け、此類の新聞廣告など一生懸命に注意して居る、電氣療法

ヒステリー性の婦人 (醫學士 杉江 董)

平素身體が不具合のことが多く色々の病氣が起つて來る、時々非道い頭痛がする、頬が痛んで物が噛めない、其他手足の關節や下腹の兩側や胸壁や乳房や脊筋などが痛むことが多

(十六)

又球の様なしこりが横腹の邊りから肩に來て頸の方に上る様な感じがすることがある、某婦人は下腹に何か一杯這入つて居てそれが前の方に張り出んとする様な心地がすると云つた。昔はヒステリーとは何か魔の様なもの腹の中に居て、身體中を駆け廻つて居る病氣だと思はれて居たのは、畢竟此の様なことがあるので始まつたものらしい。

皮膚の感じなども所々が感じなくなつたり半身が無感覺になつたりする反對に非常に過敏になつて少し觸つても非常に痛く、歩行することが出來ず、非道いものになると何んでもないものが觸つてもそこが痛くなる又感じが間違つて仕舞つて冷たいものに觸つて熱く感じたり切つても痛くなくなつたり電氣に觸れても平氣な様なことがある。

物の味が解らなくなつたり、鹽っぱい味が苦くなつたり、臭が變つて不快な臭がよくなつたり、耳が遠くなつたり、眼が近くなつたり、色の見別がつかなくなつたり、又物が大きく見えたり、反對に小さく見えたり、或は又化物や幽霊が見えたりする。

だの、エツキス光線だの、ラヂウム療法など、すぐとやつて見たくなる。兎角我れと我が身體を悪くして絶望悲觀して了ひ、話もせず、食事も仕ない、とう／＼自殺などして仕舞ふ様なことも尠なくない。

併し斯う云ふ人には、一方に暗示性が非常に亢進して居り、病氣も氣から出て居るのであるから他から安心、慰藉を與へたり、自分でも氣が向いて來る様なことがあると、からりと治つて了ふ様なことが多い。今朝病床に呻吟つて居たものが夕方には平氣に起きて饒舌つて居る様なことがある、殊に自分の好き好んだことをする時などは病氣などは何時の間にか消えて了ふ。頭痛や腹の痛みに苦んで寢て居ても好きな芝居とか活動寫真とかに出掛ける話になると急に元氣付いて病氣が無くなつて了ひ機嫌よく先きになつて出掛ける様なことがある。

(十八)

ヒステリー性のもの、奇異なる現象としては、不快の感情が倒になつて了ふ様なことがある、嫌な臭がよくなつたり、嘔を催す様な味を好む様になつたりする、尤もこれは普通の人もも妊娠の時などにはよく見る所で酸味のを非常に好く様になるなども此類である。

一七九

ことがある、砂、白墨、海藻、水蛭、蛙などを食ふものがある。又爪で壁をガリ／＼掻き音を聞くと普通の人は大した気にもならぬのに、ヒステリー性のものになるとそれで非常に怒つたりすることがある。初めて遇つた人の前で笑つたり、葬式の伴に行つて巫山戯たり、死體を見ると喜んだり、わざ／＼墓場の見える所に往つたりなどする變りものが出来る。

又ヒステリー性のものには萬引癖が起ることがある。名譽地位があつて金も持つて居ながら盗む様なことがある。殊に月経時、妊娠時などに一番多い。大概急に汗ばりやうして、自分では何うして其んな氣になつたか解らぬ様なことがある。またよく解つて居る様な時でも美しい反物など見ると、虚榮や、模倣の空想がむら／＼と湧き出で之れに伴ひて慾望の感情が非常に強劇に起り、一方理性で制止することが出来なくなつてつい窃んで了ふ、普通の人の精神では到底出来ない事である。

某女は度々萬引をした、常に其理由を聞くと何故か綺麗なものを見るとむら／＼と欲しくなり、盗まねばならぬ様になると答へた。

某少女十六歳は月経時に萬引の癖があつて、香水だのリボンだのを取つて其れを頭に挿して其店に態々出掛けて、すぐつかまつたと云ふ様な事がある、其盗んだ理由は自分でも解らぬと云うて居る。

多い、その間には種々のことをするが、他から見るとちやんと解つて居る様に見えるが、本人は何も知らずにやつて居るので後になつて更に覺がない、そして此状態は必ず癡癡に伴ふとばかりと限らぬ、癡癡發作がなくとも頭痛のする時、月経の時、感動した時、酩酊した時、幻覺などのある時などにもよく起ることがある。

朦朧状態には二日も三日も夢中に外を徘徊したり、萬引をしたり、放火したり、小供を殺したりする、又其間のことば間違つて記憶するが爲めに強姦されたなど、虚偽の訴へをする様なことがある。

或る婦人は夫に死別れ、六歳になる小供を連れて名古屋から甲府へ紙の行商をしなから歸る途中東海道沼津で小供を見失ひて非道心配の結果ヒステリーの夢中状態に陥り東京の病院に送られた四五日の間の事を全く知らず、醒めて病院に居るのに驚いた。

或少女は夜九時頃使に出たまゝ、一晩中何處を歩き廻つたか其間のこと何事も覺えず、朝十時頃に歸つて来て今迄先生の所で御馳走になつて居たとか螢を取つて居たとか間違つた事を云ひ、まだ夜だと思つて居るらしく自分で寢床を延べて寢に就いた、前夜は何處か山中を歩き廻つた形跡が認められた。

或婦人は朦朧状態中に分娩して其子を自分の前掛で包み、井戸の中に投げ込んだ、本心になつて初めてそれを知つた。

ヒステリー性の婦人 (醫學士 杉江 董)

某婦人は殊に妊娠の時になると萬引の癖が出た、今其實例を擧げて見ると八月の二十八日から九月十日の間即ち十二日間に萬引した物品は、枕五個、手巾七枚、シャツ六枚、机掛一枚、敷布二枚、小供用ジャケット二枚、股引一足、絹シヨール一枚、靴下三足、細帯一本、洋刀二口、サジ三本、小供靴一足、小供ズボン一足、金釦一個、其他雜品價格に積つて百圓許りのものを盗んで居つた。其他放火したり、人を傷害したりするのも嫉妬、怨恨、復讐などの強劇な感情に驅られ茫然やう夢中になつたり、又は是非の別がつかなくなつたりするが爲めに行る様なことが多い。矢張り殊に月経や妊娠時に多い、其上生來智慧の薄い様なものは一層危険である。

某婦人は自分の夫の情婦に對して嫉妬の念に燃えて居たが、月経時に感動爆發して其女に硫酸を振りかけ兩眼を失明さすに至つた。又或る婦人は嫉妬の爲め相手の婦人が山に薪を拾つて居た所を後から細繩でくびり殺した、又或る婦人は夫の不身持を氣にし自殺せんとして書置を仕様としても無筆の爲め其代りに我家に放火して書置に代へたことがある。

(十九)

猶ほヒステリーには時々癡癡に見る様な身體の癡癡や眩暈や睡眠などが發作することがある、そして其前後に意識が茫然やうして全で夢中になつて了ふ、所謂朦朧状態となる事が又或婦人は赤坊を殺して置いて自分は汽船に乗つて東京から銚子に行き、宿屋に泊つて居た所を捕まり、其間のことを何事も覺えがなかつた様な例がある。

或は夜中に突然飛び起きて戸外を徘徊したり、山に登つたり、橋を渡つたり、手紙を書いたり、裁縫したりして再び自分の寢床に入り、朝になつて更に覺えない様なことも此の類である、某婦人は二十七八歳から家政を放任して顧みなくなり、我が儘強情で夫の云ひ付けを聞かぬ、怒りぼけて誰れかれの別なく食つてかゝる、夜中突然飛び出して、野となく山となく歩き廻つた。

非道いものになると色々の幻覺や妄想などがあつて夫や子供や親が鬼の様に見えたり、或はお化が見えたりするため恐れ慄きて錯亂の結果飛んでもない亂暴などする様なことがある。

某電話交換手は小供の時から神經質であつたが、十七歳頃から寢て目が覺めると男が來て起こした様な氣がしたり、泥棒が刀を抜いて窓から忍び込むのが見えたりしたことがある、又突然夢中になつて自分と自分で頭髮を断ち切り、櫛やピンを投げ捨てたりする様なことがあつた、氣が舊に復して其間の事は少しも覺えがない。

其他非常に興奮して躁ぎ廻つたり、反對に鬱ぎ込んで仕舞つたり、無言不動のまま食事もしない様なことがあつたり、間違つたことを何時迄も云ひ張つたりする様なこともある。